

第1章 発掘調査の概要

第1節 はじめに

2013年度は、常三島キャンパスで2件の発掘調査を実施した。一つ目は地域連携プラザ地点調査、二つ目はフロンティア研究センター地点調査である。地域連携プラザ地点では江戸時代の武家屋敷の境溝が、フロンティア研究センター地点では江戸時代の武家屋敷地内から生活用水利用のための石組み遺構が発見されるなどの成果が得られた。以下、常三島遺跡の歴史的環境と既往の調査についてまず述べ、それぞれの調査地点で得られた成果の概要を報告する。

第2節 常三島遺跡の歴史的環境と既往の調査

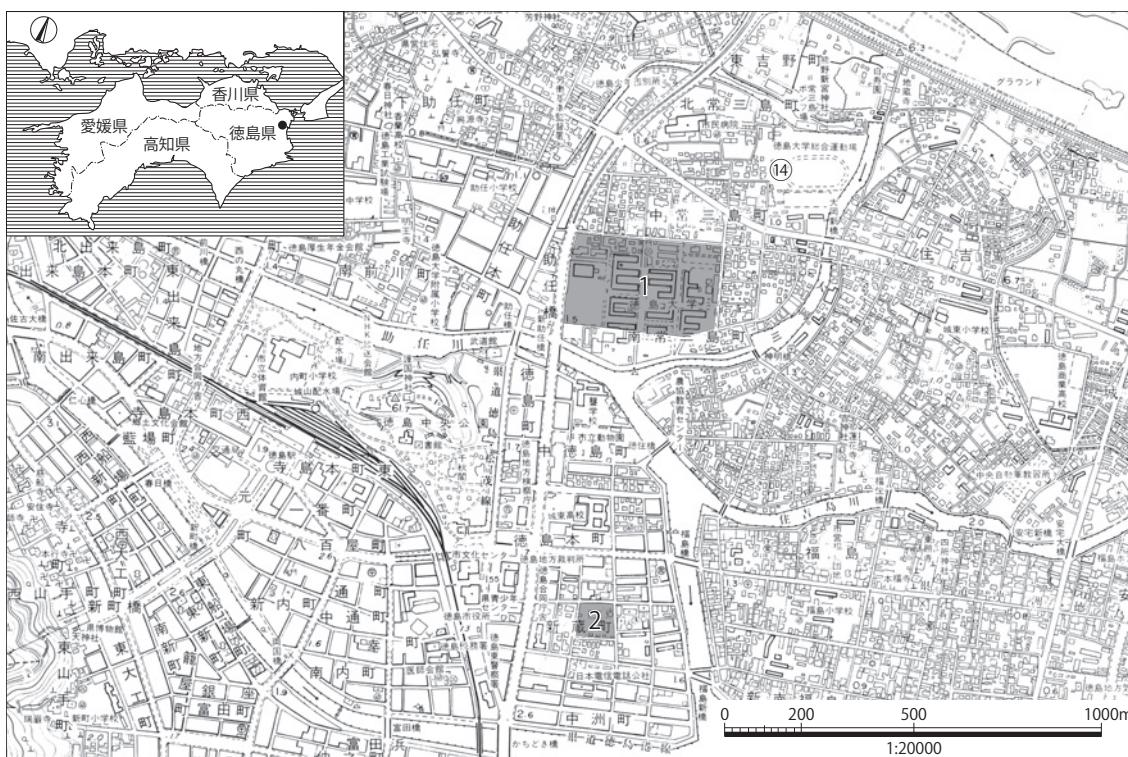
1. 歴史的環境

常三島遺跡は、徳島大学常三島キャンパス（徳島市南常三島町）および総合グラウンド（徳島市北常三島町）に所在し、四国の東半部を紀伊水道に向けて東流する吉野川河口付近のデルタ地帯に位置する（第1図）。近世に阿波徳島藩が中州の一部を埋め立て、武家屋敷地を営み、その結果として遺跡が形成された。本遺跡の所在する地区は、文書、絵図などの資料によって、主として中・下級武士の屋敷地であったことが判明している。また助任川沿いの南側では、17世紀前半から中頃に属する徳島藩の初期船置所「安宅島」の一部が発見されたことは注目される。明治時代になると、この地一帯は、江戸時代の街路区画が残されたまま、急速に水田化した後、徳島県尋常師範学校付属小学校や徳島大学工学部の前身である徳島高等工業学校が設置された。その後、太平洋戦争を経て、戦後まもなくしてから徳島大学常三島キャンパスが設置され、今日に至っている。

常三島遺跡の周辺では、徳島城が築かれた城山（渭山）山麓に、縄文時代後期から晩期に属する城山貝塚が存在する。ここからは弥生土器も出土したとされるが、それ以外に常三島遺跡の付近で、弥生時代、それに続く古墳時代の遺跡は現在でも確認されていない。吉野川河口付近には阿波国の中里があり、奈良時代の8世紀中頃には、東大寺領阿波国新島荘が置かれていた。この新島荘には3地区があり、そのうちの枚方地区が常三島遺跡の北西に位置する現在の北田宮・上助任町付近に比定されている。その後、新島荘は10世紀頃まで確実に存続していたことが文献記録に残されている。鎌倉時代に入ると、1203（建仁3）年、南助任保と津田島を寄進された大和春日神社が荘園化のため立券荘号を申請し、翌年に富田荘が正式に成立したという記録がある。その後、豊臣秀吉の四国平定によって、1585（天正13）年、蜂須賀家政が阿波国に入部し、現在の徳島城を中心とした城下町建設に着手する。これを契機として、常三島遺跡は本格的に形成されることになる。

2. 既往の調査

常三島キャンパスでは、2012年度までに18次にわたる発掘調査が実施されていた。その結果、江戸時代にこの地に形成された徳島城下町常三島地区の様相が徐々に明らかにされつつある。本キャン



第1図 常三島遺跡の位置

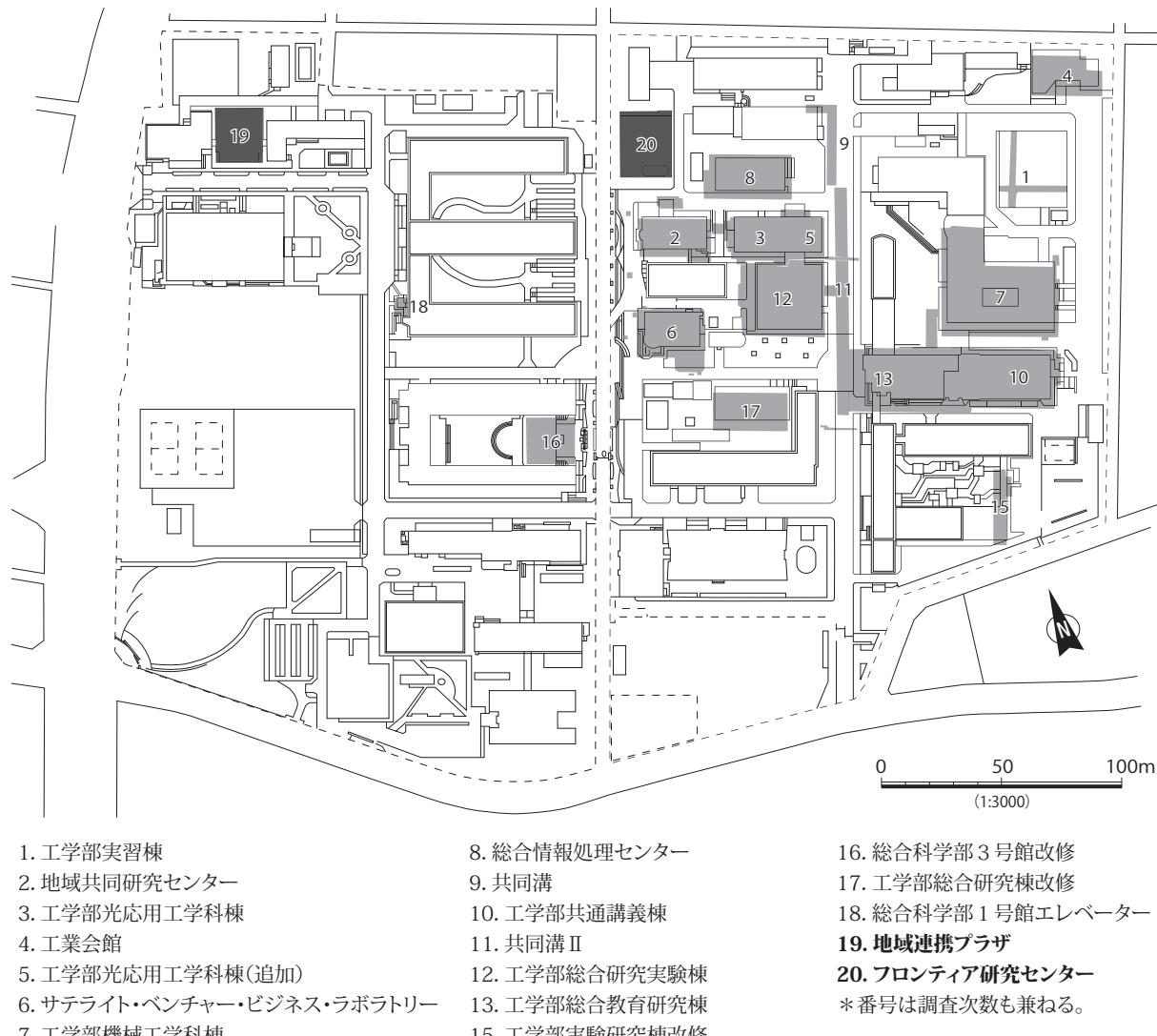
1. 常三島遺跡（常三島キャンパス） 2. 新蔵遺跡（新蔵キャンパス） ⑭は常三島遺跡第14次調査地点 国際航業株式会社調製『徳島市全図2』をもとに作成。

パスは、南北に走る道路を境として、西側の総合科学部エリアと東側の工学部エリアに分けられるが、発掘調査は工学部エリアで16次、総合科学部エリアで2次にわたって実施してきた。地域連携プラザ地点調査は、総合科学部エリアで3回目の調査であり、常三島遺跡としては、第19次調査にあたる。また、フロンティア研究センター地点調査は、工学部エリアでは17回目の調査であり、常三島遺跡としては、第20次調査にあたる（第1図・第1表）。

第3節 常三島遺跡第19次調査（地域連携プラザ地点）

1. 調査の概要

- 調査地の名称 常三島遺跡
- 調査地の所在地 徳島市南常三島1丁目1番地
- 調査の目的 南常三島地区・地域連携プラザ新設その他工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
- 調査面積 458 m²
- 調査期間 平成25年6月6日～7月1日
- 調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）
- 調査担当 端野晋平（調査主任）
 - 遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）
 - 山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）



第2図 常三島遺跡の発掘調査地点

h. 調査補助 古川裕美・前田千夏（以上、施設マネジメント部技術補佐員）

2. 調査経過

6月6日から重機掘削を開始し、11日からは調査区壁の精査、側溝の掘削を開始した。重機によって攪乱部分を除去した結果、砂層が調査区の全面に現れ、これを遺構検出面として、調査を進めることにした。12日は台風接近のため、作業を中止した。13日からは重機で除去できなかった攪乱土を人力で掘削しつつ、遺構の検出に努めた。そうした中で、調査区の北側において東西方向に走る1条の溝（溝1）を、調査区西壁・東壁と平面とで確認した。17日からは調査区平面図・土層断面図の作成と、それらの写真撮影を開始した。20～24日までは雨天のため、作業を中止した。25日から溝1の掘削を始めたが、26日はまたしても雨天のため、作業を中止せざるを得なかった。27日は溝1の掘削を終え、全景写真のための清掃を開始した。28日はまず全景写真の撮影を行い、その後で調査区平面図・土層断面図の作成、遺構の写真撮影を行った。それと同時に、撤収作業を開始した。7月

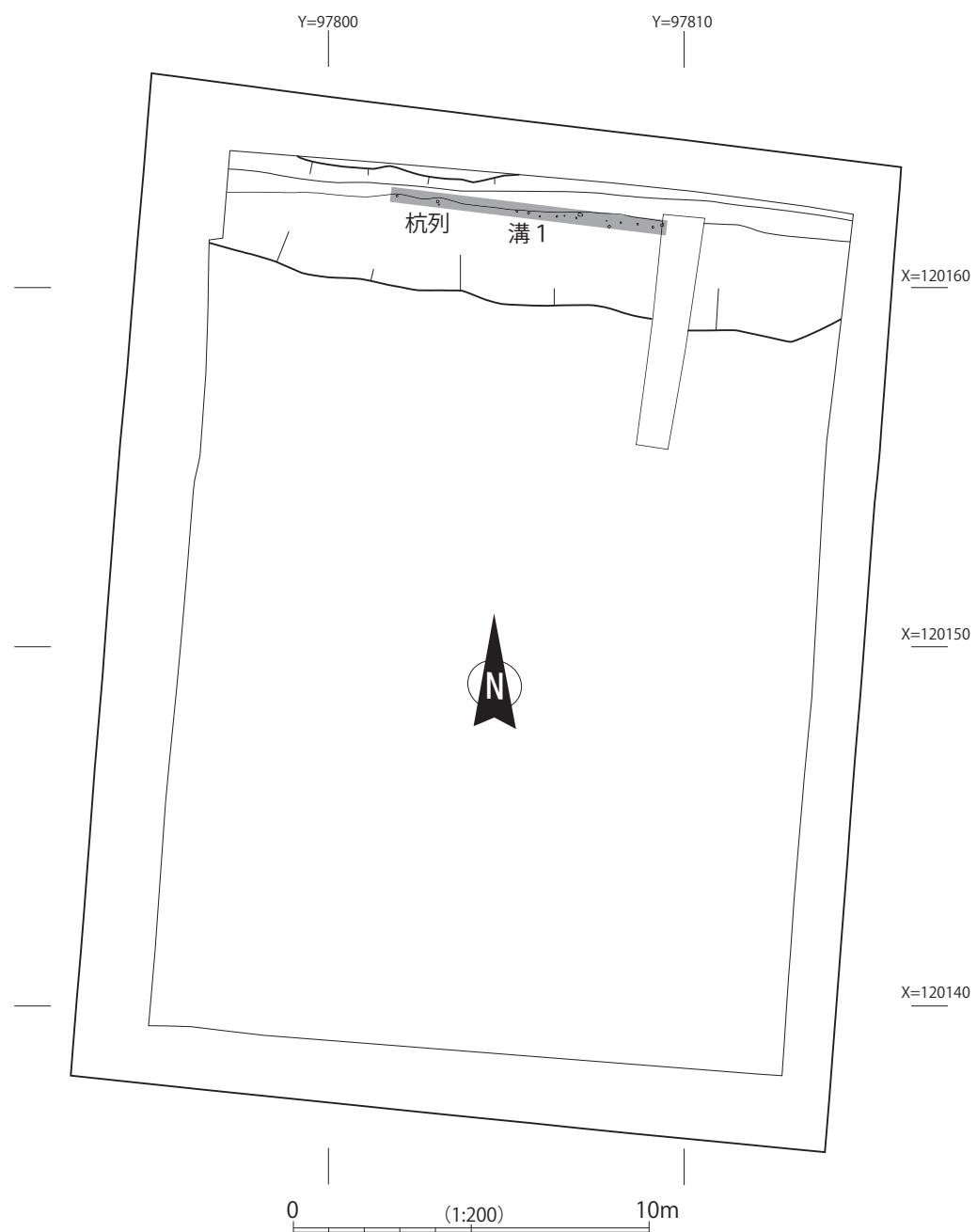
第1表 常三島遺跡発掘調査一覧表

調査名	調査実施年 (年度)	調査地点	調査面積 (m ²)	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)
第1次調査	1992年 (平成4年度)	工学部実習棟試掘	160	9月10日～9月20日 (11日間)	徳島大学	東潮 ○北條芳隆
第2次調査	1993年 (平成5年度)	地域共同研究センター	373	10月1日～10月30日 (1か月)	徳島大学	東潮 ○北條芳隆
第3次調査	1995年 (平成7年度)	光応用工学科棟	783	8月22日～3月25日 (7か月)	徳島大学	東潮 ○橋本達也
第4次調査	1995年 (平成7年度)	工業会館	400	12月1日～1月31日 (2か月)	徳島市教委	勝浦康守
第5次調査	1996年 (平成7年度)	光応用工学科棟－追加	165	4月17日～5月30日 (1か月半)	徳島大学	東潮 ○橋本達也
第6次調査	1996年 (平成7年度)	サテライト・ベンチャー・ ビジネス・ラボラトリー	619	6月6日～8月10日 (2か月)	徳島大学	東潮 ○橋本達也
第7次調査	1997年 (平成8年度)	機械工学科棟	1,800	7月24日～11月8日 (3か月半)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也 中村 豊
第8次調査	1997年 (平成9年度)	総合情報処理センター	687	3月28日～6月10日 (2か月半)	徳島大学	北條芳隆
第9次調査	1998年 (平成9年度)	共同溝	178	7月22日～9月4日 (1か月半)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊
第10次調査	1999年 (平成10年度)	共通講義棟I	900	5月10日～6月7日 (1か月)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊
第11次調査	1999年 (平成10年度)	共同溝II-4	200	6月28日～8月11日 (1か月半)	徳島大学	○北條芳隆 橋本達也 中村 豊
		共同溝II-1 共同溝II-2	171 300	7月15日～5月26日 (10か月)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也
第12次調査	2000年 (平成11年度)	総合研究実験棟	1,000	7月24日～11月27日 (4か月)	徳島大学	北條芳隆
第13次調査	2001年 (平成12年度)	総合教育研究棟 (共通講義棟II期)	1,110.6	3月15日～6月8日 (3か月)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊
第14次調査	2002年 (平成13年度)	総合グランド管理舎 器具庫の配水管	100	2月21日～3月1日 (2週間)	徳島大学	北條芳隆
第15次調査	2002年 (平成14年度)	工学部電気電子棟	253	5月20日～8月5日 (2か月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊
第16次調査	2002年 (平成14年度)	総合科学部3号館	532	7月29日～10月31日 (3か月)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊
第17次調査	2003年 (平成15年度)	工学部建設(総合研究)棟	381	4月28日～7月17日 (2か月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊
第18次調査	2007年 (平成19年度)	総合科学部1号館エレベータ	35	1月16日～1月21日 (6日間)	徳島大学	中原 計
第19次調査	2013年 (平成25年度)	地域連携プラザ	458	6月6日～7月1日 (1か月)	徳島大学	○端野晋平 遠部 慎 山口雄治
第20次調査	2013年 (平成25年度)	フロンティア研究センター	756	6月27日～9月11日 (2か月半)	徳島大学	○端野晋平 遠部 慎 山口雄治

1日には撤収作業を終え、すべての調査を完了した。

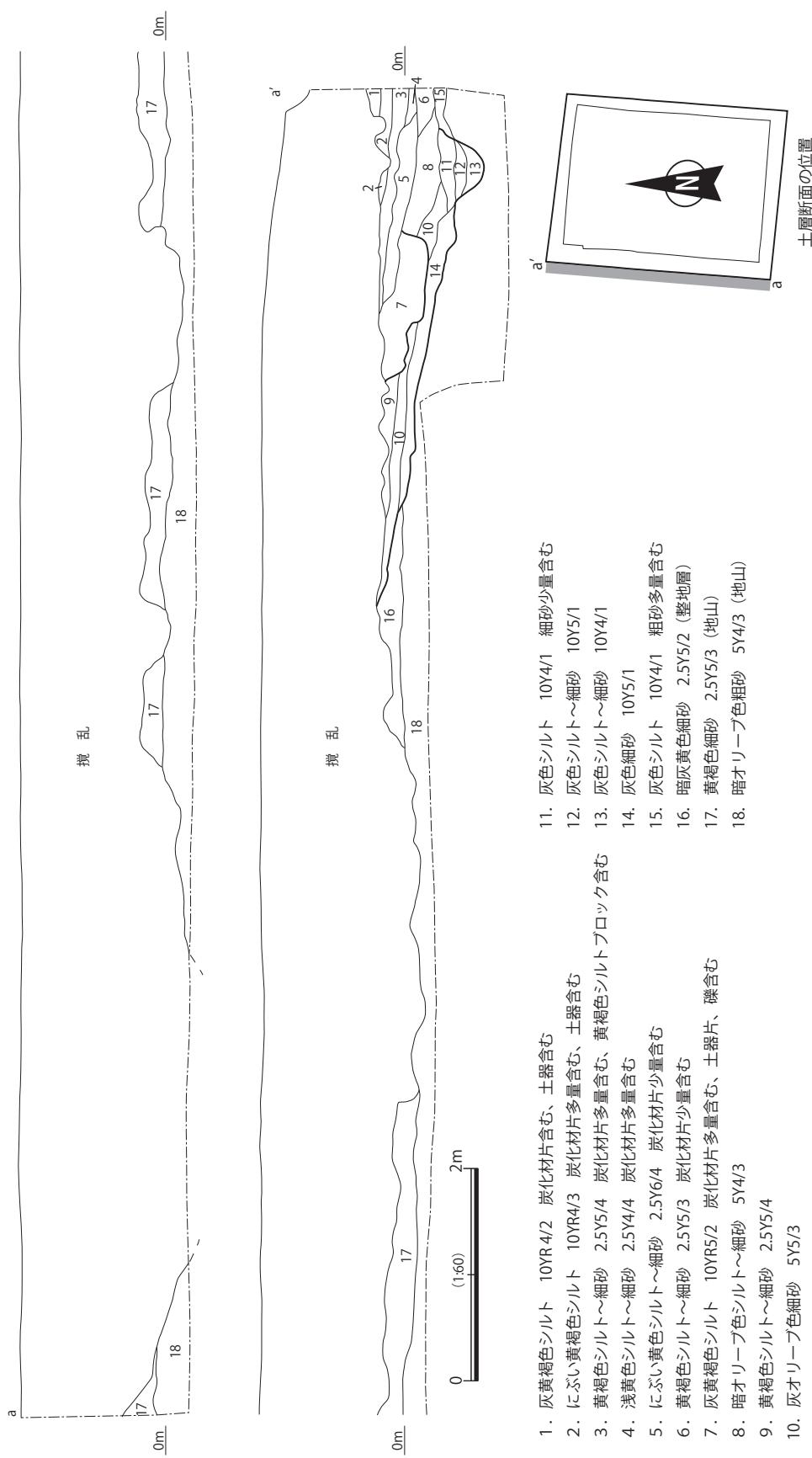
3. 調査成果

本調査区では、1枚の遺構面が調査され、遺構面の北側で東西方向に延びる1条の溝（溝1）が検出された（第3図、写真1・3）。溝の規模は残存部位で幅約3m、深さ約1mである。溝1は、17世紀後半以降の所産とみなせる初期伊万里の皿が出土した16層（整地層）を切っていることから（第4図、写真2）、この時期以降に掘削されたものと考えられる。この溝は、14・15層が堆積した後に再び、掘削されたことが土層断面より把握される。溝1の埋土からは、陶磁器（肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器）、土師質土器などの遺物が出土した。溝1は、11～13層を下層、それより上の層を上層として掘削と遺物の取り上げを行ったが、双方の層から出土した遺物に明確な時期差は見出せない。搅乱には、師範学校時代の建物の基礎や建築部材などと思われる青石や木材が含まれていたことから、溝1は1898年に同学校に關係する建物が建てられる前には埋没していたものと考えられる。『御山下島分絵図』（安政年間、個人蔵）などの実測分間地図によれば、本調査区は二つの武家屋敷地（安政



第3図 第19次調査地点遺構全体図

年間は北側に杉浦家、南側に寺沢家）を横断する位置にあり、溝1はこれらの屋敷地の境にほぼ一致していることが分かる（第5図）。したがって、溝1は屋敷地と屋敷地とを隔てる溝とみて間違いない。溝1の下層からは杭列が検出された（写真4）。第1次調査（工学部実習棟地点）では、溝にともなって土留めの板を支える杭列が検出されていることからみて（北條・定森編, 2006）、本例もそれと同様の機能を有したものかと思われる。なお、溝以外には遺構を検出することはできなかったため、屋敷地内の空間利用は不明である。



第4図 第19次調査地点調査区西壁土層断面図



第5図 第19次調査地点付近と絵図との重ね合わせ図
『御山下島分絵図』(安政年間、個人蔵)をもとに作成。

4. 出土遺物の概要

本調査で出土した遺物の量は、コンテナ11箱分である。溝1や包含層、搅乱から、陶磁器、土師質土器、瓦、動物骨などが出土した。陶磁器には、肥前系磁器（初期伊万里皿、碗、広東碗、瓶）、肥前系陶器（灰釉皿、灰釉唐津碗、絵唐津皿）、瀬戸・美濃系陶器（天目碗）などがある（写真5・6）。

5. まとめ

本調査の成果は、絵図で知られる近世の武家屋敷の境界が、溝というかたちで実際に確認されたことにある。溝は、本調査で得られた情報からは、17世紀後半以降のある時期に掘削され、19世紀末までに埋没したとしか言えない。溝の掘削・埋没の詳細な時期については今後の検討に委ねたい。また、溝以外には遺構を確認することはできず、屋敷地内の空間利用が分からなかつたことは残念ではある。とはいっても、常三島遺跡全体で見た場合、これまで他の地点で確認してきた屋敷境溝が、やはり本調査地点でも確認されたということは、常三島地区での近世武家屋敷研究に一定の前進をもたらすものといえる。

なお、以上の内容は暫定的なものであり、今後、詳細な検討を経て正式報告を行う。

第4節 常三島遺跡第20次調査（フロンティア研究センター地点）

1. 調査の概要

- a. 調査地の名称 常三島遺跡
- b. 調査地の所在地 徳島市南常三島1丁目1番地
- c. 調査の目的 南常三島地区・フロンティア研究センター新営に伴う埋蔵文化財発掘調査
- d. 調査面積 756 m²
- e. 調査期間 平成25年6月27日～9月11日
- f. 調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・端野晋平）
- g. 調査担当 端野晋平（調査主任）
 - 遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）
 - 山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）
- h. 調査補助 古川裕美・前田千夏（以上、施設マネジメント部技術補佐員）

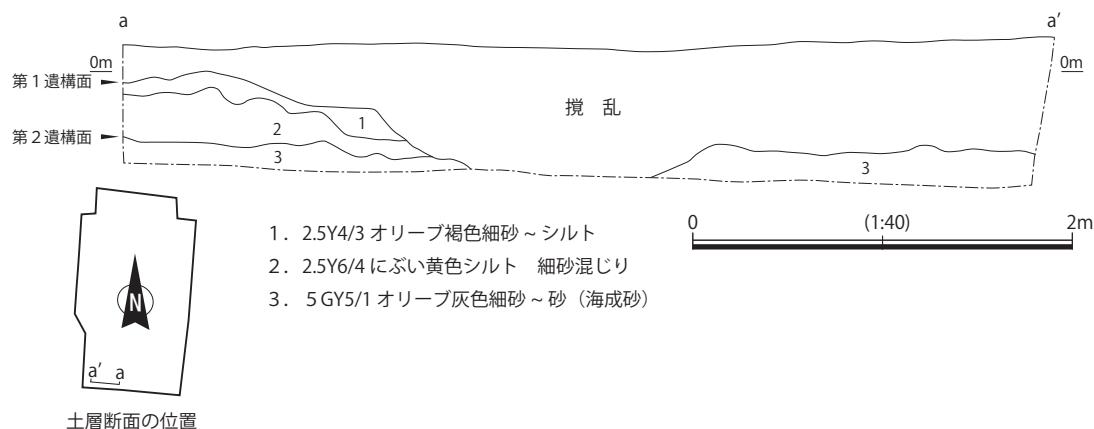
2. 調査経過

6月27日から重機掘削を開始し、28日からは同じキャンパスで発掘調査を終えつつあった地域連携プラザ地点から器材の搬入を始めた。7月1日には、器材の搬入を終え、環境整備を開始した。その後、調査区内の地下水排水のためのウェルポイント設置に数日間を要し、結局、現場に作業員を入れ、作業を開始したのは4日からであった。同日からは、まず重機掘削では取り除けなかったコンクリート杭などの搅乱除去を行い、そして調査区壁の清掃、側溝の掘削を開始した。重機によって搅乱部分を除去した結果、オリーブ褐色細砂～シルト層が現れ、11日からは、これを第1遺構面として

遺構検出を進めた。その結果、多数の土坑・ピットが検出され、17日からはこれらの掘削を行いつつ、遺構・調査区壁土層の写真撮影と実測を行った。26日は、第1遺構面の全景写真の撮影に備えて、清掃を行った。29日は、全景写真の撮影を行い、その後、1・2層の掘り下げを始めた。掘り下げは、第1遺構面での遺構検出漏れが予想されたので、3層（地山）の上面（第2遺構面）と1層の上面（第1遺構面）との中間に、遺構面（第1.5遺構面）を設定して、そこまで行った。30日からは、遺構面までの掘り下げと遺構検出を併行して行い、8月1日からはそれらの作業に加え、遺構掘削を行いつつ、遺構・調査区壁土層の写真撮影と実測を行った。また、山口特任助教の岡山大学転出によって、以後、端野・遠部の調査員2人体制で調査を実施することとなった。12日から16日まではお盆休みとして作業を中断し、19日から再開した。20日からは、第1.5遺構面を3層上面まで掘り下げ、それを第2遺構面とみなして遺構検出を始めた。22日からはそれらの作業に同時併行で遺構掘削を行い、遺構・調査区壁土層の写真撮影と実測も行った。また、調査区西側に落ち込みが検出されたので、その範囲を確認するためのサブトレンチを、東西方向・南北方向で二つ設定し、それぞれを掘削した。東西方向サブトレンチの土層断面を観察した結果、この落ち込みが遺構ではなく、自然地形であると考えられたため、当初は南北方向サブトレンチで範囲を確認するにとどめ、落ち込み部分の掘削は行わずに調査を終了する予定であった。ところが、南北方向サブトレンチを掘削時に、石組み遺構が検出され、それが西側まで延びることが確認された。そのため、第2遺構面については、調査期間の制約上、全景写真撮影後に、落ち込み部分を掘削し、石組み遺構の調査を行うことにした。26日の午前中は雨天のため、作業を中止したが、午後になり天候が回復したので、全景写真撮影のための清掃を行い、その終了後に写真撮影を行った。27日以降は落ち込みの掘削と石組み遺構の検出、遺構・サブトレンチ壁土層の写真撮影・実測を行った。30日には落ち込みの掘削と石組み遺構の検出、写真撮影が完了し、台風の接近が予想されたので、石組み遺構についてはシートで養生を施した。9月に入ると、遠部助教の北海道大学転出によって、調査員は端野1名となった。9月2日は、台風接近による天候不良のため、遺構の実測が思うように進行せず、3・4日は雨天のため、現場作業を実施することはできなかった。5日に作業を再開したが、台風通過中、調査区内は大雨により一時冠水したにもかかわらず、石組み遺構は養生を十分に行ったかいもあって、検出時の状態をほぼ保っていた。同日より石組み遺構の実測を開始し、9日にはそれを完了した。10日からは石組み遺構の石は除去して、その下の盛土の掘り下げを開始し、11日にはそれらの作業を完了した。そして、石組み遺構の周囲や盛土の下で検出された杭などの実測を行った。同日には撤収作業を終え、すべての調査を完了した。

3. 調査成果

本調査区の基本土層は三つの層に分けられる（第6図、写真9）。1・2層はそれぞれオリーブ褐色細砂～シルト、にぶい黄色シルトからなり、ともに近世の遺物を含む。3層はオリーブ灰色細砂～砂からなる自然堆積相である。1層上面を第1遺構面、3層上面を第2遺構面として調査し、調査区の南壁土層で、第1遺構面は標高0.00～0.20m付近、第2遺構面は標高-0.34～-0.40m付近に位置する。現在、各層および遺構出土の遺物については整理作業中であるため、各遺構面に形成された遺構の所属時期を確定することはできない。そこで、これについては、これまで周辺で行われた調



第6図 第20次調査地点調査区南壁土層断面図

査成果を参考にしつつ、おおまかな見通しを示したい。

まず、本調査区のすぐ南側に位置する地域共同研究センター地点（北條・定森編, 2006）の基本土層（B区東半部北壁）を示すと以下のとおりである。

最上層：灰色砂層。一部明治期の耕作土を含む。標高 0.25 ~ 0.10 m。

中層：黄褐色（暗オリーブ灰色）シルト混じりの細砂層。標高 0.14 ~ - 0.12 m。

下層：黄褐色（暗オリーブ灰色）シルト混じりの中粒砂層。中層下面から地下水により掘削限界となった標高 0.40 mまで厚さを確認。

この地点では基本土層と遺構面との関係は明示されていないが、第1遺構面は「18世紀後半～19世紀代、一部に17世紀代を含む」とあるので、一部明治期の耕作土を含む最上層～中層で検出された面と捉えられる。また、第2遺構面は「17世紀後半～18世紀中頃、一部に19世紀代を含む」とあり、かつ遺構の「輪郭の検出直後に地下水の湧水によって全体が水没する状況」とあるので、掘削限界となった下層において検出した面と考えられる。土層の所見と標高からみて、地域共同センター地点の中・下層はそれぞれ本調査区の1・2層に対応しそうである。したがって、本調査区の第1遺構面は18世紀後半～19世紀代、第2遺構面は17世紀後半～18世紀中頃に属する遺構が形成されたという見通しが得られる。そして、地域共同センター地点の上層にあたる層の全てと中層にあたる層のかなりの部分は、本地点では調査に先立つボイラー室建設時の削平によって失われていると判断される。

そのほか、本調査区に近接する既調査区のうち、概要報告書から遺構面に関する有益な情報を得られるものとしては、工学部光応用工学科棟地点（徳大埋文, 1997a）、サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリ－地点（徳大埋文, 1997b）がある。以下、各調査地点の遺構面に関する概略を示す。

工学部光応用工学科棟地点

第1遺構面：標高 0.20 m付近。江戸時代後期（18世紀末～幕末）。

第2遺構面：標高 - 0.05 ~ - 0.10 m付近。江戸時代中期（18世紀前葉～中葉）

第3遺構面：標高 - 0.20 m付近。江戸時代前期（17世紀代）。

サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリ－地点

第1遺構面：標高0.20m付近。江戸時代後期～明治・大正時代（18世紀後葉～幕末）

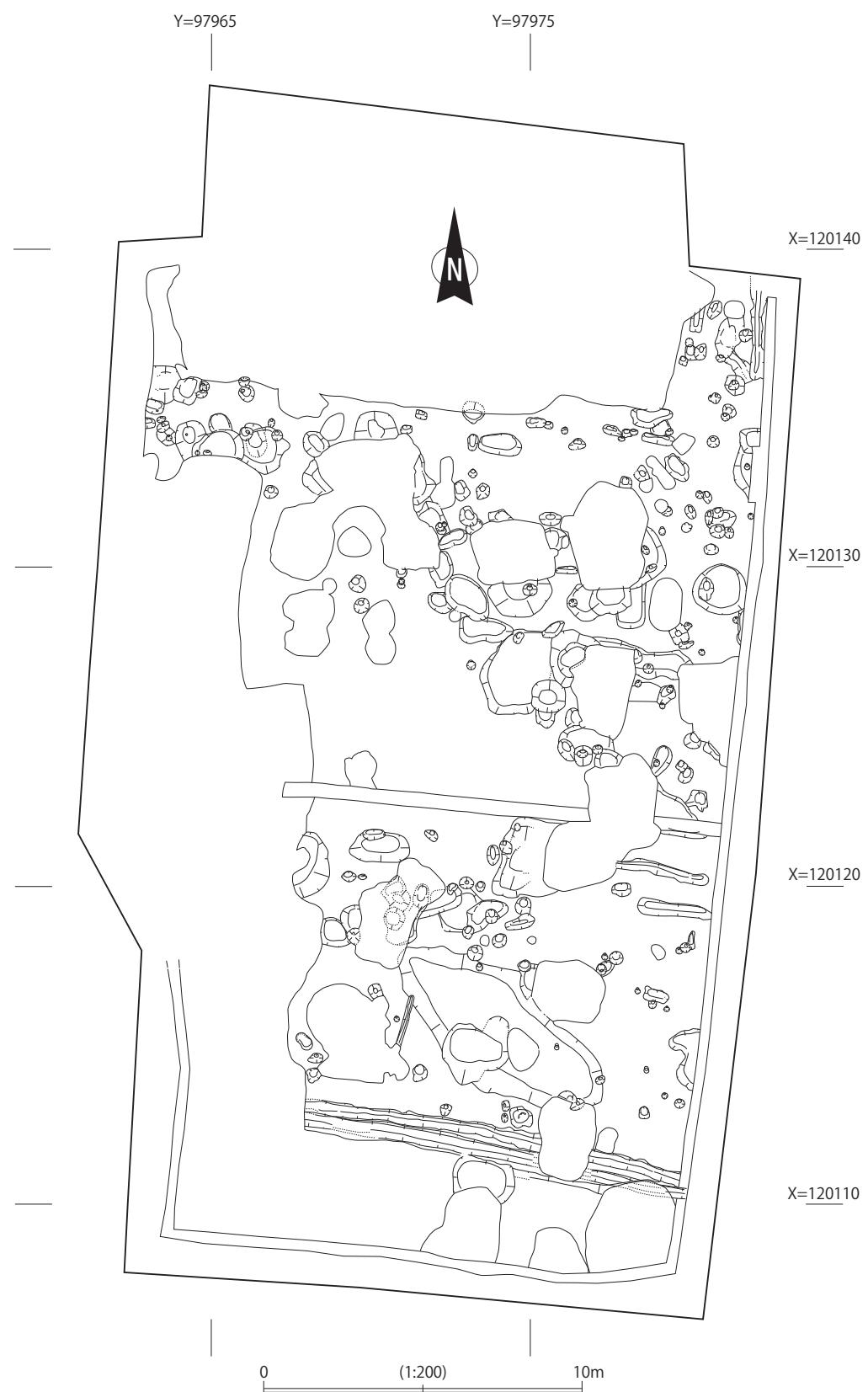
第2遺構面：標高0.00m～-0.20m付近。江戸時代前期～中期（17～18世紀）

以上のように、本調査区の付近では、江戸時代前期～後期にかけての遺構面が2～3面検出されており、本調査区でもそれに類する状況であることがわかる。

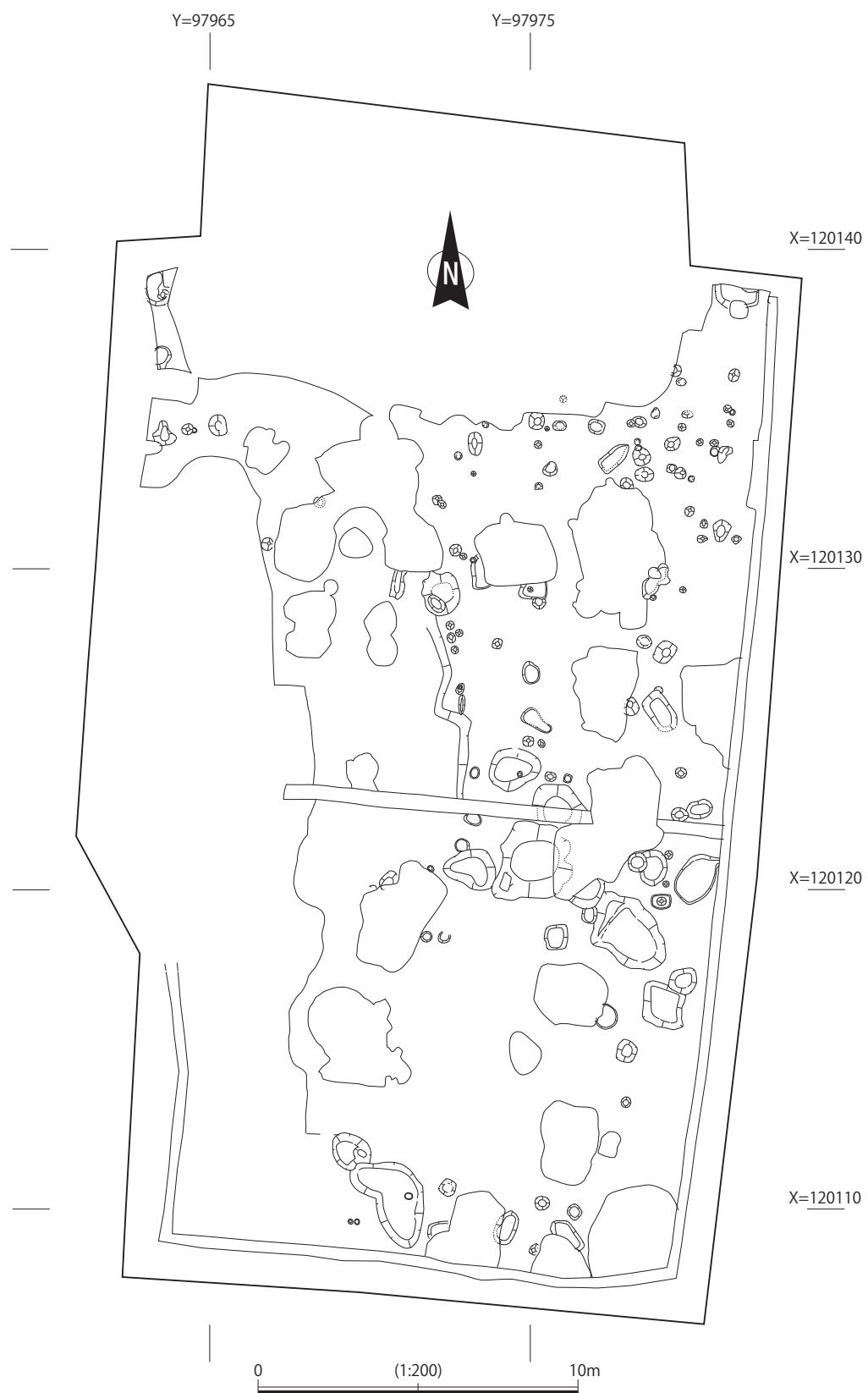
さて、本調査区では先述のとおり、2枚の遺構面を調査した。その結果、第1・2遺構面では合わせて約400基の土坑・ピット、2条の溝、第2遺構面では水場利用施設と考えられる石組み遺構が検出された（第7～9図、写真7・8）。ここでは、こうした成果の中でも最も注目すべきものとして、石組み遺構を取り上げたい。

石組み遺構は、調査区の西側中央部に位置する落ち込みの斜面から底面にかけての場所で検出された（第10図・写真10・11）。この遺構は、緑色片岩（通称・青石）を含む10～80cm大の石からなり、大きくみて落ち込みの北東付近から南西方向へと石が階段状に並べられた部分（階段状部分）と、落ち込みの底面に大小の石が東西方向で数段にわたって積み重ねられた部分（積石状部分）とに分けられる。石の分布範囲は、階段状部分で長さ2.8m、幅0.9m、積石状部分で長さ3.5m、幅1.3mを測る。石の高さは、階段状部分の最も高いところで標高0.16m、積石状部分の最も低いところで標高-1.30mである。階段状部分の南西端の石を除去すると、木桶が検出された。また、積石状部分の石を除去すると、盛土が検出された。さらに、盛土を除去する過程で、数本の木杭が現れた。これらは積石を構築する前の基礎となった構造物と理解される。盛土は、黄灰色砂質土の1層と灰黄色砂の2層とに分層できる。1層からは肥前系？陶器、瀬戸・美濃系陶器が、2層からは肥前系陶器・磁器、備前焼、瓦質？土器、土師質土器、瓦、砥石、墓石などが出土した。これらの遺物のうち、肥前系陶器絵唐津皿？（16世紀末～17世紀初め）、肥前系陶器皿（灰釉砂目）（17世紀中頃）といった陶器の製作時期からみて、この石組み遺構は17世紀中頃以降に造られたものとみられる。これは、先述した第2遺構面の遺構面の時期についての見通しとも矛盾しない。

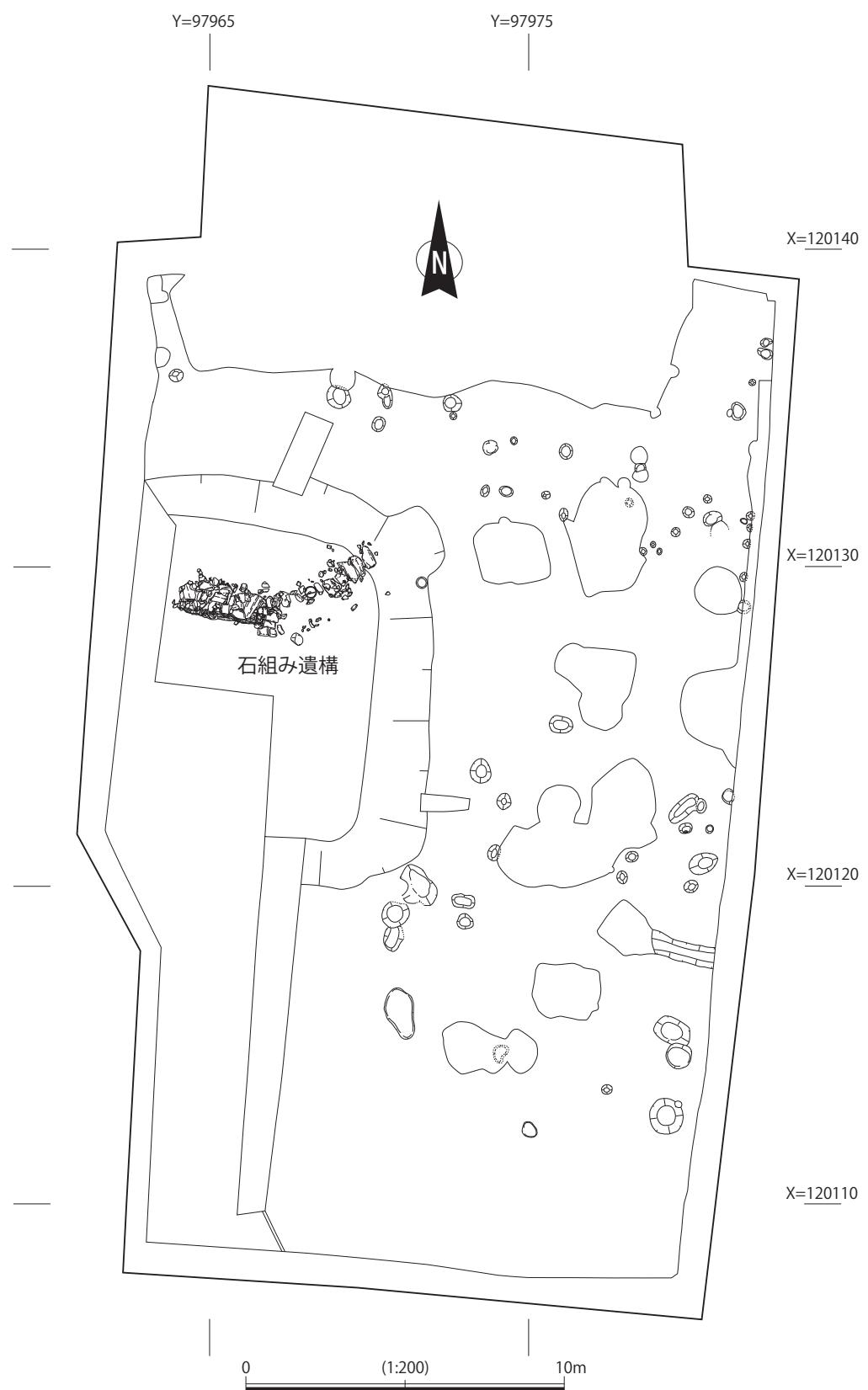
それでは、この遺構の用途についてはどうであろうか。『御城下絵図』（享保12〔1727〕年頃作成、徳島大学附属図書館所蔵）、『徳島御城下切絵図』（元文年間〔1736～1741〕作成、徳島県立博物館所蔵）、『徳島御山下絵図』（文化・文政年間〔1804～1830〕、昭和礼文社複製刊行）、『御山下島分絵図』（安政年間〔1854～1860〕、個人所蔵）、『阿州御城下絵図』（明治5〔1872〕年作成、徳島県立博物館所蔵）などの絵図によれば、本調査区は江戸時代の享保年間から明治時代の初め頃まで継続して、長谷川家の屋敷地であったことがわかる。そして、調査区のすぐ西側には、南北に道が走っていたことは明らかであり、この石組み遺構が所在する落ち込みの範囲は、西側に広がったとしても屋敷地内に収まるものと推定される（第11図）。落ち込みは、底面のレベルが標高-1.30mに達し、調査中はウェルポイントで排水を行っていたにもかかわらず、湧水を止めることはできなかったことから、埋没前は當時、水が溜まっていたものと考えられる。こうしたことから、この石組み遺構は生活用水を得るために水場へと降りる階段、足場としての用途が推定されよう。ただし生活用水とは言っても、ここで得られた水には多くの塩分が含まれるため、飲用には適さなかつたであろう。



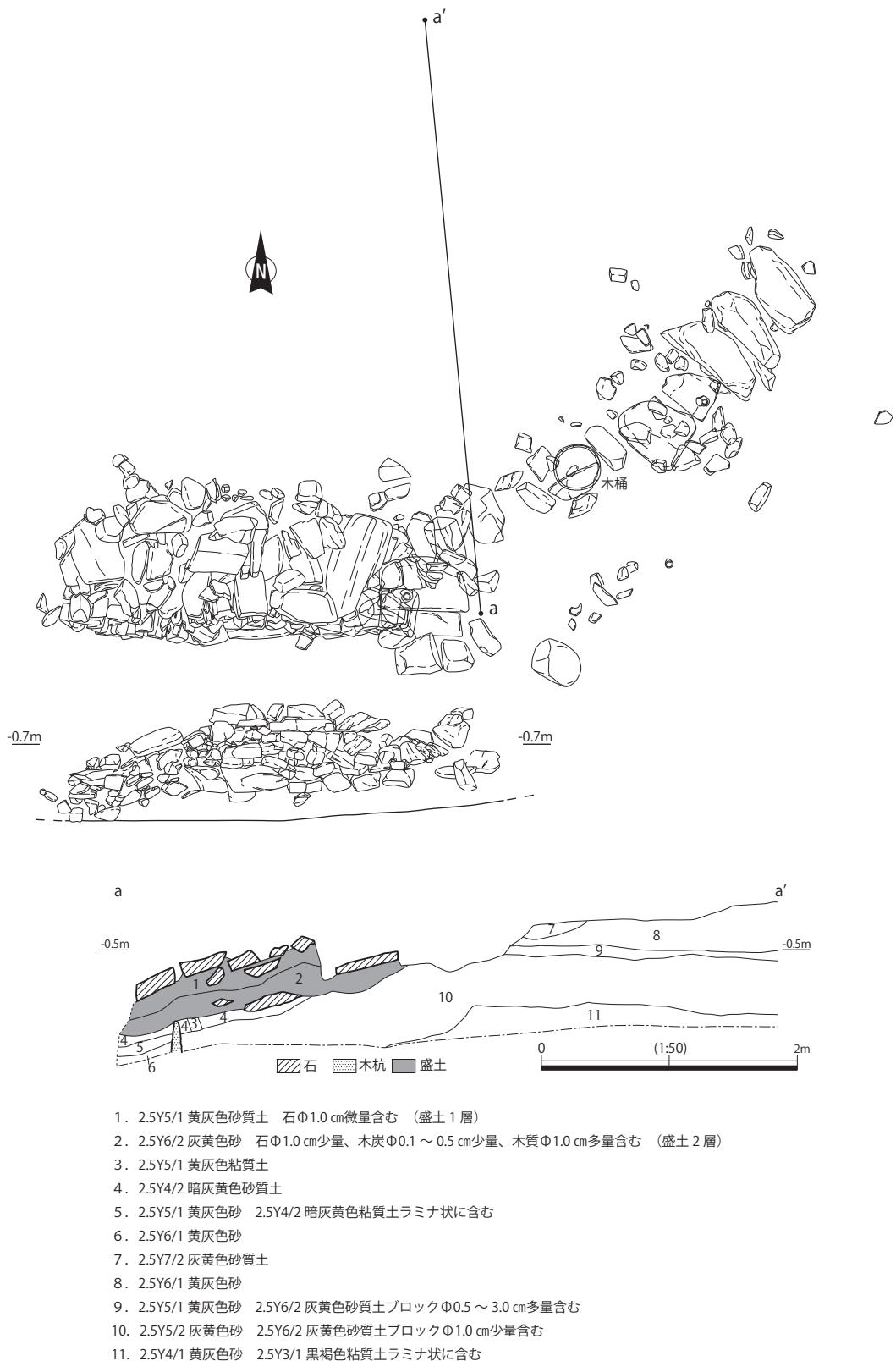
第7図 第20次調査地点遺構全体図（第1遺構面）



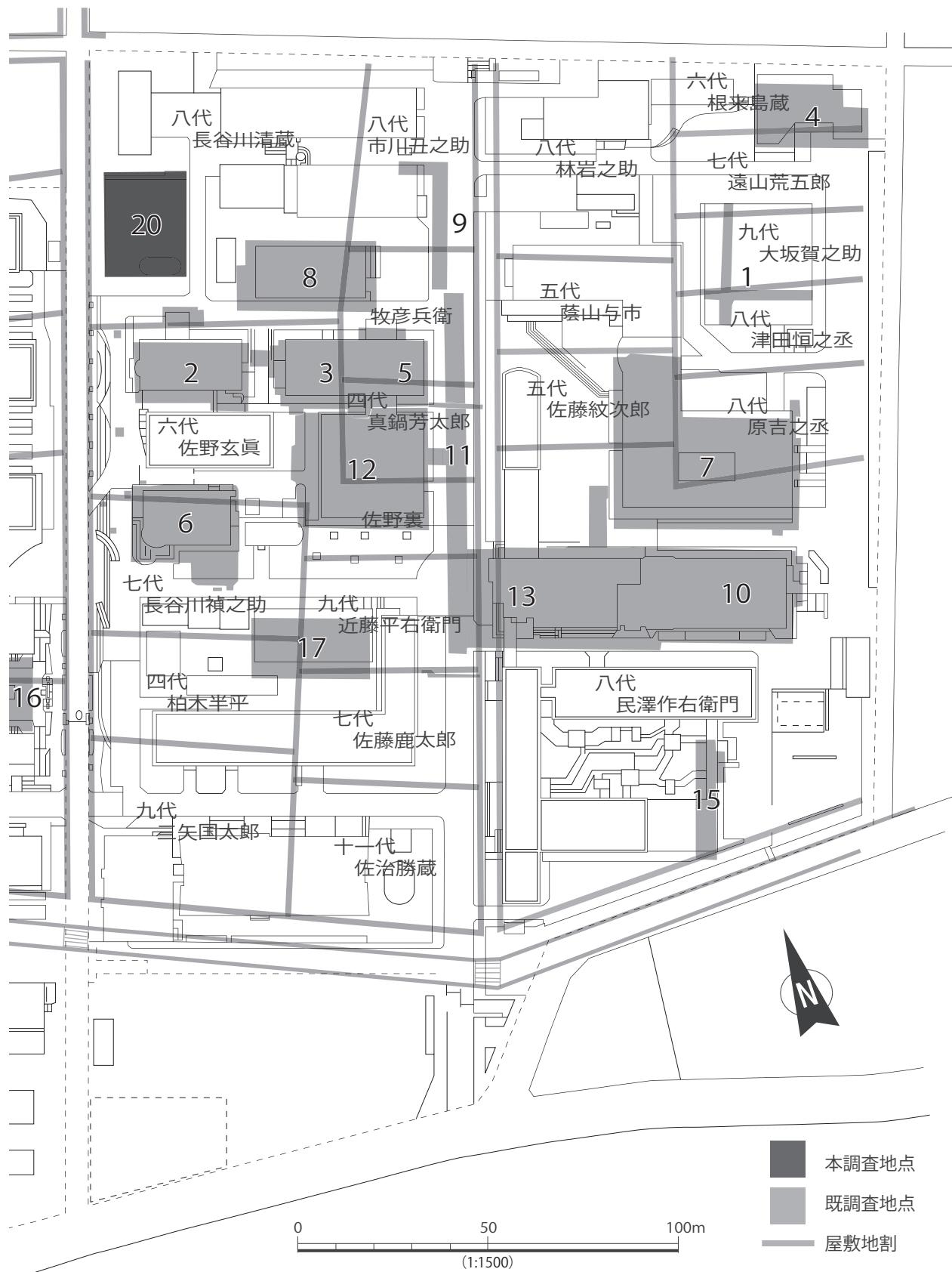
第8図 第20次調査地点遺構全体図（第1.5遺構面）



第9図 第20次調査地点遺構全体図（第2遺構面）



第10図 第20次調査地点石組み遺構



第11図 第20次調査地点付近と絵図との重ね合わせ図
『御山下島分絵図』(安政年間、個人蔵)をもとに作成。

4. 出土遺物の概要

本調査で出土した遺物の量は、コンテナ16箱分である。土坑・ピット、石組み遺構、包含層、搅乱から、陶磁器、土師質土器、瓦、石製品、貝類などが出土した（写真12）。陶磁器には、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前焼などがある。

5. まとめ

本調査の最も大きな成果は、常三島遺跡では初めて、17世紀中頃以降に造られた水場利用施設と考えられる石組み遺構が検出されたことである。これによって、近世常三島地区での武家屋敷内の空間利用の一端が明らかとなった。しかし現在、整理作業の途中であるため、屋敷地全体の空間利用については不鮮明なままである。今後、他の遺構や遺物の整理作業の結果をふまえて、明らかにしたい。

なお、以上の内容は暫定的なものであり、今後、詳細な検討を経て正式報告を行う。

（端野晋平）

文 献

- 北條芳雄・定森秀夫編 2006『常三島遺跡2－工学部実習棟地点・地域共同研究センター棟地点－』
国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室
徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室 1997a『徳島市常三島遺跡埋蔵文化財発掘調査実績報告書 工学部光応用工学科棟』
徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室 1997b『徳島市常三島遺跡埋蔵文化財発掘調査実績報告書 サテライト・ベンチャービジネス・ラボラトリー』



写真1 第19次調査地点全景（東から）



写真2 第19次調査地点調査区西壁土層断面（東南から）



写真3 第19次調査地点溝1完掘状況（東南から）



写真4 第19次調査地点溝1杭列検出状況（東から）



写真5 第19次調査地点出土陶磁器（1）

1.瀬戸・美濃系陶器天目碗（溝1下層） 2.肥前系陶器灰釉唐津碗（溝1上層）

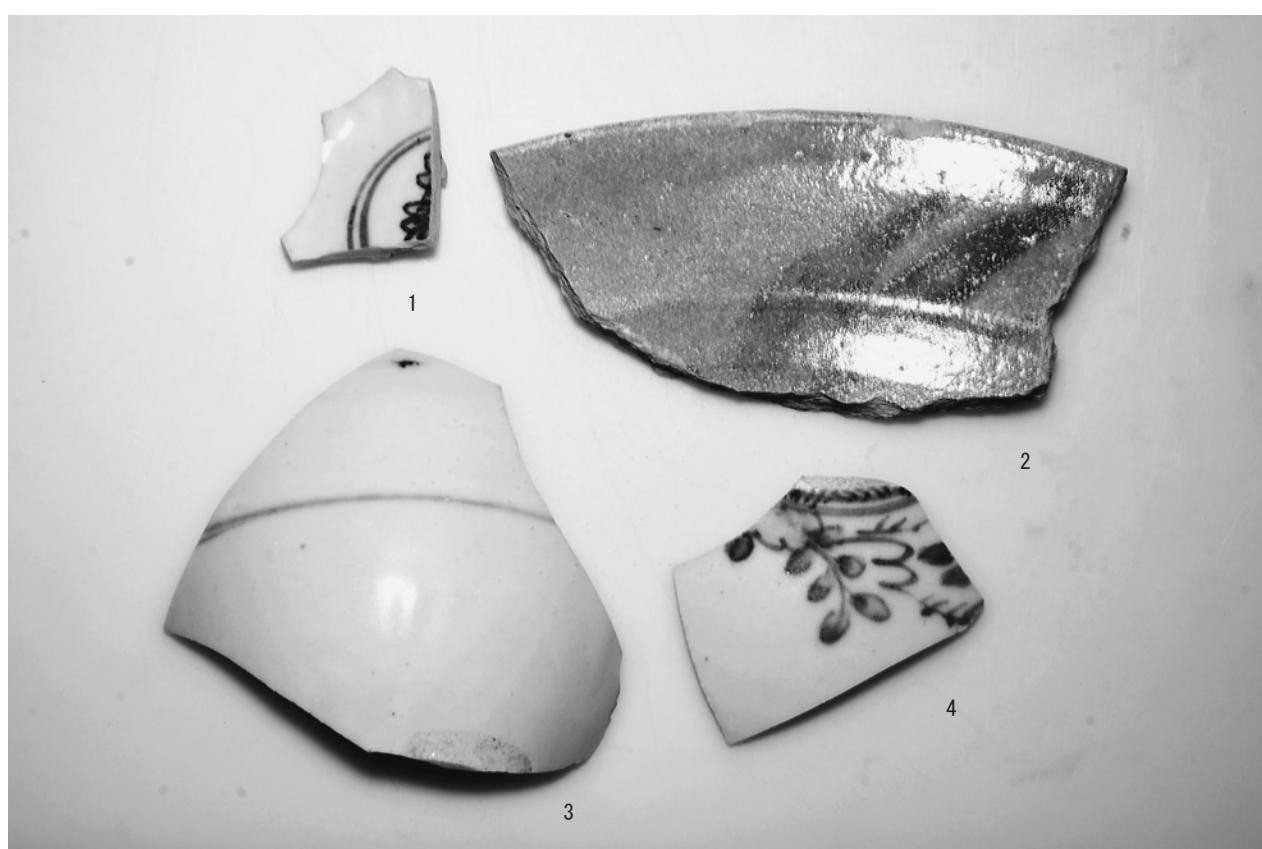


写真6 第19次調査地点出土陶磁器（2）

1.肥前系磁器初期伊万里皿（整地層） 2.肥前系陶器絵唐津皿（溝1下層） 3・4.肥前系磁器瓶（溝1下層）



写真7 第20次調査地点第1遺構面全景（東から）



写真8 第20次調査地点第2遺構面全景（東から）



写真9 第20次調査地点調査区南壁土層断面（北から）



写真10 第20次調査地点石組み遺構（南西から）



写真 11 第20次調査地点石組み遺構（南から）



写真 12 第20次調査地点石組み遺構出土遺物

1. 肥前系陶器二彩手鉢
 2. 瀬戸・美濃系陶器天目碗
 3. 肥前系陶器絵唐津皿
 4. 肥前系陶器皿（灰釉砂目）
 5. 肥前系磁器皿（染付）
 6. 備前焼擂鉢
 7. 瓦質？土器火鉢焜炉類（行火）
 8. 土師質土器皿
 9. 砥石
 10. 墓石
- 2は盛土1層、それ以外は盛土2層出土。